

## 【B年】復活節第2主日(2023年4月16日)

## 【旧約聖書日課】列王記下7章1～16節

1 エリシャは言った。「主の言葉を聞きなさい。主はこう言われる。『明日の今ごろ、サマリアの城門で上等の小麦粉一セアが一シェケル、大麦二セアが一シェケルで売られる。』」2 王の介添えをしていた侍従は神の人に答えた。「主が天に窓を造られたとしても、そんなことはなかるう。」エリシャは言った。「あなたは自分の目でそれを見る。だが、それを食べることはない。」

3 城門の入り口に重い皮膚病を患う者が四人いて、互いに言い合った。「どうしてわたしたちは死ぬまでここに座っていられようか。」4 町に入ろうと嘗試してみたところで、町は飢饉に見舞われていて、わたしたちはそこで死ぬだけだし、ここに座っていても死ぬだけだ。そうならアラムの陣営に投降しよう。もし彼らが生かしてくれるなら、わたしたちは生き延びることができる。もしわたしたちを殺すなら、死ぬまでのことだ。」5 夕暮れに、彼らはアラムの陣営に行こうと立ち上がったが、アラムの陣営の外れまで来たところ、そこにはだれもいなかった。

6 主が戦車の音や軍馬の音や大軍の音をアラムの陣営に響き渡らせられたため、彼らは、「見よ、イスラエルの王が我々を攻めるためにヘト人の諸王やエジプトの諸王を買収したのだ」と言い合い、7 夕暮れに立って逃げ去った。彼らは天幕も馬もろばも捨て、陣営をそのままにして、命を惜しんで逃げ去った。

8 重い皮膚病を患っている者たちは陣営の外れまで来て、一つの天幕に入り、飲み食いした後、銀、金、衣服を運び出して隠した。彼らはまた戻って来て他の天幕に入り、そこから運び出して隠した。9 彼らは互いに言い合った。「わたしたちはこのようなことをしてはならない。この日は良い知らせの日だ。わたしたちが黙って朝日が昇るまで待っているなら、罰を受けるだろう。さあ行って、王家の人々に知らせよう。」10 彼らは行って町の門衛を呼び、こう伝えた。「わたしたちはアラムの陣営に行つて来ましたが、そこにはだれもいませんでした。そこには人の声もなく、ただ馬やろばがつながれたままで、天幕もそのままでした。」11 門衛たちは叫んで、この知らせを中の王家の人々に知らせた。

12 夜中に王は起きて家臣たちに言った。「アラム軍が我々に対して計っていることを教えよう。我々が飢えているのを知って、彼らは陣営を出て野に隠れ、『イスラエル人が町から出て来たら、彼らを生き捕りにし、町に攻め入ろう』と思っているのだ。」13 家臣の一人がそれにこう答えた。「ここに残っている馬の中から五頭を選び、それに人を乗せて偵察に送りましょう。彼らも、ここに残っているイスラエルのすべての民衆、また既に最期を遂げたいイスラエルのすべての民衆と同じ運命にあるのです。」14 こうして、彼らが馬と二台の戦車を選ぶと、王は、「行って見てくるように」と命じて、アラムの軍勢の後を追わせた。15 彼らはアラム軍の後を追って、ヨルダンまで来たが、その道はどれもアラム軍が慌てて投げ捨てた衣類や武器で満ちていた。使いの者たちは帰って来てこのことを王に報告した。

16 そこで民は出て行ってアラムの陣営で略奪をほし、いまにし、主の言葉どおり上等の小麦粉一セアが一シェケル、大麦二セアが一シェケルで売られるようになった。

## 【使徒書日課】ヨハネの黙示録19章6～9節

6 わたしはまた、大群衆の声のようなもの、多くの水のどろきや、激しい雷のようなものが、こう言うのを聞いた。

「ハレルヤ、  
全能者であり、  
わたしたちの神である主が王となられた。」  
7 わたしたちは喜び、大いに喜び、  
神の栄光をたたえよう。  
小羊の婚礼の日が来て、  
花嫁は用意を整えた。  
8 花嫁は、輝く清い麻の衣を着せられた。  
この麻の衣とは、  
聖なる者たちの正しい行いである。」

9 それから天使はわたしに、「書き記せ。小羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ」と言い、また、「これは、神の真実の言葉である」とも言った。

## 【福音書日課】ルカによる福音書24章13～35節

13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、14 この一切の出来事について話し合っていた。15 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。16 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。17 イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。18 その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在しているながら、この数日そこで起こったことを、あなただけにご存じなかったのですか。」19 イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。20 それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。21 わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくたさると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。22 ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、23 遺体を見つげずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。24 仲間の者が何人か墓へ行つてみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」25 そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、26 メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのでないか。」27 そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。29 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなつた。32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。33 そして、時を移さず出發して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、34 本當に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。35 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 列王記下 7章1～16節

<sup>1</sup>エリシャは言った。「主の言葉を聞きなさい。主はこう言われる。『明日の今頃、サマリアの門では、上質の小麦粉一セアが一シェケル、大麦二セアが一シェケルとなる。』」<sup>2</sup>王の介添えをしていた侍従が神の人に、「主が天に窓を造られたとしても、そんなことはありえない」と答えると、「あなたは自分の目でそれを見ることになる。だが、それを食べることはない」とエリシャは言った。

<sup>3</sup>さて、門の入り口には、規定の病を患う四人の男がいて、互いに言った。「どうして私たちは、死ぬまでここに座っていなければならないのだ。町に入ろうと言ってみたところで、町は食糧不足で、私たちはそこで死ぬだけだろう。しかし、ここに座っていても死ぬだけだ。そうならいっそ、アラムの陣営に投降しよう。もしあの連中が私たちを生かしてくれるなら、生き延びることができよう。もし私たちを殺すなら、死ぬまでのことだ。」<sup>4</sup>夕暮れに、彼らはアラムの陣営に行こうと立って、アラムの陣営の外れまでやって来た。ところが、そこには誰もいなかった。<sup>5</sup>主が、戦車の響き、馬のいななき、また大軍のどよめきをアラムの陣営に響き渡らせられたので、彼らは、「イスラエルの王が我々を攻めるため、ハト人の王たちやエジプトの王たちを雇ったのだ」と互いに言って、「夕暮れには、逃げ去っていたのである。彼らは、天幕も馬もろばも捨て、陣営もそのままに、命からがら逃げ去っていた。<sup>6</sup>規定の病を患う男たちは、陣営の外れまでやって来て、一つの天幕に入り、食べて飲み、そこから銀、金、衣服を運び出して隠した。彼らは引き返して来て、他の天幕に入り、そこから持ち出して隠した。」

<sup>7</sup>彼らは互いに言った。「こんなことをしてはいけない。今日という日は良い知らせの日なのだ。黙っていて、明け方までぐずぐずしていたら、罰を受けることになるだろう。さあ、今すぐ王家の人々へ知らせに行こう。」<sup>8</sup>彼らは出かけて行って町の門衛を呼び、こう告げた。「私たちはアラムの陣営に行って来ました。しかし、そこには誰もいませんし、人の声もしませんでした。ただ馬やろばがつながれたままで、天幕もそのままでした。」<sup>9</sup>門衛たちは叫んで、この知らせを中の王家の人々に知らせた。

<sup>10</sup>王は夜中に起き、家臣たちに言った。「アラムが私たちに対してたくらんでいることを教えよう。あの連中は私たちが飢えているのを知っている。だから、『彼らが町から出て来たら、生け捕りにして町に攻め入ろう』と考え、陣営を出て野に隠れているのだ。」<sup>11</sup>すると、家臣の一人が言った。「ここに残っている馬の中から五頭を選んで、偵察に行かせましょう。いずれにせよ、あの者たちも、ここに残っているイスラエルの民衆と同じようになるのです。すでに死んだイスラエルの民衆と同じようになるのです。」<sup>12</sup>彼らが二台の戦車と馬を選ぶと、王は、「偵察に行け」と言って、アラムの軍勢の後を追わせた。<sup>13</sup>彼らがアラムの後を追ってヨルダン川まで来ると、どの道もアラムが慌てて投げ捨てた衣服や武器でいっぱいであった。使いの者たちは戻って、王に報告した。

<sup>14</sup>そこで民は出て行って、アラムの陣営から奪い取った。主の言葉どおり、上質の小麦粉一セアは一シェケル、大麦二セアは一シェケルであった。

## ヨハネの黙示録 19章6～9節

<sup>6</sup>また私は、大群衆の声、大水のとどろき、激しい雷のようなものが、こう言うのを聞いた。

「ハレルヤ、全能者である神、主が王となられた。」

<sup>7</sup>私たちは喜び、大いに喜び

神の栄光をたたえよう。

小羊の婚礼の日が来て

花嫁は支度を整え

<sup>8</sup>輝く上質の亜麻布を身にまとった。

この上質の亜麻布とは

聖なる者たちの正しい行いである。」

<sup>9</sup>それから天使は私に、「書き記せ。小羊の婚礼の祝宴に招かれている者は幸いです」と言い、また、「これは、神の真実の言葉である」とも言った。

## ルカによる福音書 24章13～35節

<sup>13</sup>この日、二人の弟子が、エルサレムから六ノスタデイオン離れたエマオという村に向かって歩きながら、<sup>14</sup>この一切の出来事について話し合っていた。<sup>15</sup>話し合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。<sup>16</sup>しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。<sup>17</sup>イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。<sup>18</sup>その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在しているながら、ここ数日で起こったことを、あなただけにご存じなかったのですか。」<sup>19</sup>イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。<sup>20</sup>それなのに、私たちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。<sup>21</sup>わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。<sup>22</sup>ところが、仲間の女たちが私たちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、<sup>23</sup>遺体を見つげずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。<sup>24</sup>それで、仲間の者が何人か墓へ行って見たのですが、女たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」<sup>25</sup>そこで、イエスは言われた。「ああ、愚かで心が鈍く、預言者たちの語ったことすべてを信じられない者たち、<sup>26</sup>メシアは、これらの苦しみを受けて、栄光に入るはずではなかったか。」<sup>27</sup>そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを解き明かされた。

<sup>28</sup>一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。<sup>29</sup>二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていきます」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。<sup>30</sup>一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、祝福してそれを裂き、二人にお渡しになった。<sup>31</sup>すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。<sup>32</sup>二人は互いに言った。「道々、聖書を説き明かしながら、お話しくださったとき、私たちの心は燃えていたではないか。」<sup>33</sup>すぐさま二人は立って、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、<sup>34</sup>主は本当に復活して、シモンに現れたと言っていた。<sup>35</sup>二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・4月16日「復活節第2主日」の日課主題は「復活顕現(1)」。

・旧約聖書日課は、「列王記下」から、「エリシャ物語」の伝承逸話の一つ、「対アラム戦争」の逸話の一部。使徒書日課は、「ヨハネの黙示録」から、終末的な勝利のしるしとして描かれる「小羊の婚宴」の幻の箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、「エマオへの途上で復活のイエスが顕現する伝承」の箇所。

**旧約日課(列王記下7章より)**

・「列王記」は、ユダヤ正典「前の預言者」の第四部で、カナン定住時代を描く「イスラエル正史物語」の最終巻を構成する。便宜上、「上下」巻に分けて扱われてきたが、文書としては一卷本として作成されたもの。「列王記」が扱うのは、ダビデ王の最晩年から南王国ユダの滅亡とバビロン捕囚までの時代で、南北両王国を含めてすべての王が取り上げられていると考えられる。本書は、①ソロモンの王位継承・神殿建立と没後の王国分裂の物語、②「預言者エリヤおよびエリシャの物語」として描かれる北王国オムリ王朝打倒の物語、③アッシリアによる北王国滅亡およびバビロニアによる南王国滅亡の物語、という三つの大きな物語によって構成されていると見ることができる。日課箇所は、第二の部分の内、「エリシャの物語」として構成される伝承物語の一部。

・「エリシャ物語」は、「エリヤ物語」に続く物語として構成されており、「預言者エリシャ」は「預言者エリヤ」の正統かつ直伝の後継者として登場させられるが、両預言者の性格付けは大きく異なる。時代は、首都サマリアを建設したオムリ王朝時代で、この王朝は、支配時代は長くないが、王国としての基礎を据えた王朝であったことは間違いない。オムリ王朝は、当時地中海交易で栄えていたフェニキア人都市国家シドンの王家と縁戚関係を結ぶなど、経済的發展をもたらしていたと考えられるが、支配地域内には多くの地方聖所＝地方権力を抱えていた。「預言者エリヤ」は、北王国とアラム王国が領有を争う地域の地方聖所を拠点とする独立系地方権力の宗教指導者と考えられ、サマリアを拠点としたオムリ王朝と激しく対峙していた。その実態は不明な点が多いが、ある種の英雄伝承物語としてエリヤの活躍が広く知られていたと考えられる。「預言者エリシャ」は、おそらくエリヤとは異なる地方聖所を拠点とする独立系地方権力の宗教指導者と考えられるが、北王国領域内の多くの地方聖所＝地方権力を束ねてサマリア＝オムリ王朝と対峙し、最終的にはオムリ王朝の軍司令官イエフを担いで王朝転覆、親地方聖所連合のイエフ王朝建設までを背後で指導した人物として、その正当性を「預言者エリヤの後継者」という主張で図ったものと考えられる。「エリシャ物語」には、エリシャが、北王国オムリ王朝と対峙する

一方で、北王国と対立するアラム・ダマスカス王国の宮廷とも通じた人物であったことが描かれている(王下8章など参照)。

・日課箇所は、アラム王国が北王国と繰り返していた戦争の一場面、アラム王ベン・ハダドが首都サマリアを包囲して兵糧攻めをした折の逸話として伝えられている。両国の戦争・紛争は、史実として不明な点が多いが、日課箇所を含む戦争物語は、詳しく伝えられている(王下6～8章)。

**使徒書日課(黙示録19章より)**

・「ヨハネの黙示録」は、「新約」正典の最終巻として置かれた文書。アジア州七教会と深い関係にある「僕ヨハネ」が同教会群に宛てた書簡形式の文書を基底に、「ヨハネが幻で示された黙示(啓示)の書」として構成されている。いわゆる「黙示文学」に分類される形式で展開しており、教会史上、正典として広く受け入れられるようになるまでに時間を要した文書の一つである。主要部分は、ヨハネが天上に引き上げられて見せられた幻の展開として物語られているが、多くの素材が旧約諸文書を資料として集められていることが明白であり、ユダヤ的伝統を強く意識されている。一方で、キリスト信者ゆえに激しい迫害を受け、殉教の危機に瀕していることを示唆する場面もあり、1世紀末のローマ皇帝ドミティアヌス帝による組織的迫害の時代背景が反映しているとも考えられるが、実際のところは不明。なお、キリスト信者が大規模に迫害を受けたのは3世紀末のローマ皇帝ディオクレティアヌス帝の時代が知られている。3世紀は、キリスト信者が急激に増加した時代で、ディオクレティアヌス帝は、その社会的影響を無視できなくなったために組織的迫害に踏み切ったとされる。しかし、2世紀ごろまでは、キリスト信者の集団は無視できるほど小規模で、迫害とされる出来事も、地方ごとのごく小規模な弾圧にすぎなかったと考えられている。とは言え、1世紀末の時代に、ユダヤ教主流と袂を分かち始めたキリスト信者の教会共同体が、ネロ皇帝の時代まで続いていたローマ皇帝によるユダヤ人優遇策の転換に危機感を抱き、迫害・弾圧の事実とはたえ局所的であったとしても、大きな信仰的課題として認識するようになっていたと考えることはできる。なお、「黙示録」の「僕ヨハネ」は、「使徒ヨハネ」や「長老ヨハネ」とは異なる人物と考えられ、本書も、「ヨハネ福音書」や「ヨハネの手紙」と同系列では扱われない。

・日課箇所は、幻の中で「バビロンの滅亡」が告げられるのに続いて、勝利のしるしとして「小羊の婚宴」が告げられる箇所。「小羊」は、「黙示録」がもつばらイエス・キリストを指す呼称として多用している。「新約」中では、多くの場合、「過越の犠牲」を指して取り上げられる。一方で、終末的なキリストとの再会(再臨)を「婚宴」によってたとえることは、「マタイ福音書」などでも見られる(マタイ9:14～、同22:1～、同25:1～)。「小羊」と「婚宴」の組み合わせは、日課箇所の独自。

**福音書日課(ルカ 24 章より)**

・日課箇所は、「エマオへの途上」で知られる主イエスの復活顕現伝承逸話。「ルカ福音書」だけが伝える伝承逸話だが、「マルコ福音書」に付加された「長い結び」には、この逸話を示唆する短い報告が含まれている。いずれにしても、主イエスの「復活顕現伝承」は、「空の墓の発見と報告」という第一場面が基本的に四福音書で共通しているにもかかわらず、第二場面以降の逸話が四福音書でまったく異なるものとして伝えられており、初期教会の基本的な共通伝承として「復活顕現」の逸話が成立しなかった意味を無視できない。なお、「ルカ」と「ヨハネ」には、逸話自体の違いにもかかわらず、共通素材が複数含まれており、両福音書が共通の背景を持つ教会共同体群の中で編纂されたことを示唆するものとなっている。

・日課箇所の逸話に登場する「二人の弟子」のうち一人は、「クレオパ」という名が挙げられている(18 節)。「クレオパ」は、「クレオパトス」の短縮形で、「クロパ」(ヨハネ 19:25)も同様と考えられるが、両者が同一人物であったかどうかは分からない。「クレオパトス」という名自体は、女性形も含めてヘレニズム化された地域でよく知られた名。

・「エマオという村」は、エルサレムからの距離(60 スタディオン=約 11 キロメートル)が説明されているが、考古学的に特定されていない(一般的には、エルサレムから 20 キロほど離れた場所がエマオの跡地とされている)。なぜ、この逸話で二人の弟子の目指す村が「エマオ」と特定されて描かれるのか、理由は不明であるが、「ルカ福音書」の背景にある教会共同体の伝承やメンバーの出自として重要な村であったのかもしれない。一方、この逸話物語中、この村に到着した際の記述として、「イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった」(28 節)とあり、「使徒言行録」の描く世界宣教のビジョンを先取りして、主イエスの目指されるところが、「エルサレム」ではなく、「エルサレムから世界へ」という広がりを持つものであったことを印象づけるために、「エルサレムから六十スタディオン離れた・・・村」という設定をしたとも考えられる。

・復活顕現伝承としては、超自然現象として有無を言わさぬ物語りとして展開することを極力排除していることがわかる。すなわち、二人の弟子に近づいてくる人物は、読者の目には「イエス」であると紹介されているが、二人の弟子からは「見知らぬ人」でしかない。その「見知らぬ人」が「イエスだと分からなかった」(16 節)が、「主の晩餐」を想起させる食事の席で「二人の目が開け、イエスだと分かった」(31 節)と描かれ、しかも、同時に「その姿は見えなくなった」(同)と描かれる。「ルカ」は、この逸話で、二人が実物として見ていた人物がただちに「イエス」であったとされることを巧妙に避け、一方で、「見知らぬ人物」であっても、ある出来事を想起させる場面で、その人物の内に「イエス」が現臨していることが「分かる」と主張している。これが、

「ルカ福音書」の考える「復活顕現」のリアリティであり、そうであればこそ、この「復活顕現」が、主イエスの言葉や出来事を想起する者の間では誰にでも起こり得ることとして考えられているのは間違いない。このような「ルカ」の「復活顕現」理解は、すでに、「空の墓の発見と報告」の逸話の中で「思い出す」(6 節、8 節)ことが求められる女の弟子たちが描写されることを通して、示されていた。

・この逸話の結部は、二人の弟子がエルサレムの仲間たちのもとに戻ると、仲間たちが「本当に主は復活して、シモンに現れた」と言っていた物語る。しかし、「ルカ」は、「シモン=ペトロ」が経験したという「復活顕現」を、「空の墓の確認」のほか何も伝えていない。

**来週の誕生日 (4月16日~22日)****主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-333 番「主の復活、ハレルヤ」は、20 世紀後半のタンザニア・ルター派牧師キヤマニワがスワヒリ語で作詞しハヤ族の伝統的旋律を付して発表。原曲は結婚式における宗教儀式で歌われる舞踏歌。ルター派でドイツ語に訳され広く知られるようになった。
- ・21-57 番「ガリラヤの風かおる丘で」(=Ⅲ5)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚晃が曲を付した。
- ・21-334 番「よみがえりの日に」は、ルカ 24:13~35 「エマオへの途上」の逸話を歌った讃美歌で、20 世紀末の礼拝改革運動の中で生まれてきた。歌詞は、米国ルター派牧師マイケル・ピーターソンが神学校の授業で作詞したもの。曲は、米国ルター派教会のカントールを務めていたマーク・セディオの作曲。

**21-333「主の復活、ハレルヤ」****Mfurahini, haleluya****English Translation**

1. Christ has arisen, alleluia. / Rejoice and praise Him, alleluia. / For our Redeemer burst from the tomb, / Even from death, dispelling its gloom.  
*Refrain: Let us sing praise to Him with endless joy; / Death's fearful sting He has come to destroy. / Our sin forgiving, alleluia! / Jesus is living, alleluia!*
2. For three long days the grave did its worst / Until its strength by God was dispersed. / He who gives life did death undergo; / And in its conquest His might did show. / (Refrain)
3. The angel said to them, "Do not fear! / You look for Jesus who is not here. / See for yourselves the tomb is all bare; / Only the grave cloths are lying there." / (Refrain)
4. "Go spread the news: He's not in the grave; / He has arisen this world to save. / Jesus' redeeming labors are done; / Even the battle with sin is won." / (Refrain)
5. Christ has arisen; He sets us free; / Alleluia, to Him praises be. / Jesus is living! Let us all sing; / He reigns triumphant, heavenly King. / (Refrain)

**21-334「よみがえりの日に」****On the Day of Resurrection**